真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546－0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話　06（6702）1980
FAX　06（6700）1854
Eメール　shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所　天理時報社

芦津分会 おぢばがえりに 中山大亮様お出まし

青年会員と語り合われる青年会長・中山大亮様（左から２人目）

8月28日、青年会は「芦津分会おぢばがえり」を開催しました。元々この日は、青年会長・中山大亮様をお迎えして大教会で総会を開催する予定でしたが、新型コロナ感染症の影響を受け、急遽（きゅうきょ）おぢばがえりへと切り替えたものです。

大亮様は、おぢばがえり後の記念行事の最中にお出ましくださり、その後の交流会で多くの会員と語り合われました。予定時間を大幅にオーバーするほど交流会は盛り上がりを見せ、大亮様と直接顔を合わせて話ができた会員は目を輝かせ、お言葉を一言も聞き逃すまいと耳を傾けました。

大亮様の親心と熱い思いを直接受けることで、これからの人生が大きく変わる若者もいることでしょう。これまで以上に、懸命に人だすけに励もうと誓った若者もいることでしょう。

青年会は、「世界たすけへの挑戦」をスローガンに掲げ、新たな道を切り拓く「あらきとうりよう」として、大きな期待がかかります。この日頂戴した勇み心をエネルギーに換え、来年1月からの三年千日の年祭活動を、喜びと勢いをもって全力で駆け抜けます。

若い者じいとして居て世界固めらるか。固められん理は世界にある。皆若き者しいかり働かにゃならん。たゞじいとして居ては、世界鮮やか花咲こう道理は無い。

（明治34年9月25日補遺）

四方正面

ある医者の話。長時間の手術を受けた赤ちゃんが、翌日にミルクを20cc飲んだ。新米の看護師が「20ccしか飲んでくれない、どうしよう」と不安そうに言うと、側にいた母親は心配し始め、なぜか赤ちゃんの容体が悪くなっていく。ところが、ベテランの看護師が「20ccも飲んでくれて、良かったですね」と言うと、母親は「良かった」と安心し、その心が赤ちゃんに伝わるのか、赤ちゃんは回復に向かうという。同じ20ccでも、見方、言い方によって、赤ちゃんの状態に大きな差が出てくる。

「言霊」というように、言葉には魂が宿り、悪いことを言えば不幸が現れ、良いことを言えば幸せが現れると考えられてきた。

成ってくることに善悪はなく、私たちの受け取り方によって、善にもなれば悪しきにもなる。日々の暮らしの中で、良いものの見方、捉え方を身に付けられるよう、努力させていただきたい。（竹）

《芦津分会おぢばがえり記念行事における大教会長挨拶》

教祖百五十年祭、立教二百年は君たちの時代

大教会長　井筒梅夫

本来なら今日は、大教会で総会を勤めるところ、構内で新型コロナウイルス感染症が発生したため、「芦津分会おぢばがえり」と振り替えの活動になりました。その中を、今日は遠方からも参加してくださり、大変ご苦労様です。

この機会に、これからのお道を背負っていく若い世代の皆さん方に期待するところをお話ししたいと思います。

25歳で大教会長に

私は25歳で大教会長になりました。父である前会長が出直したことを受けて、会長に就任したわけですが、今考えてみると、これは親神様の思召があって、親神様の段取り通りに会長に手引いてくださったのです。これは後々になって分かってきました。

私は小学校から高校まで、天理でラグビーをしていました。高校を出て大学へ行くとなったときに、「東京へ行こう」と思いました。幼い頃から天理教は嫌いではありませんでしたが、「いずれやらなければならないのなら、大学4年間は好きなことをしよう」と、ちょっと羽を伸ばして遊ばせてもらおうと思い、「遊ぶのなら東京」という短絡的な考えで、一浪までして東京の学校に入りました。

東京へ出て気持ちもワクワクしていたのですが、その1年目に芦津の学生会活動に出会いました。すると、案外楽しいし、だんだんと活動することが楽しみになってきました。「遊ぼう」と思っていた東京での学生生活でしたが、学生会活動に出会って、おぢばへ帰ってくるたびにお道の本を買ったりしながら、信仰の歩みを学生時代から進めていたのです。

4年経って卒業したら、迷いなく修養科に行きました。検定講習を受け、すぐに本部で青年勤めを始めました。24歳の時です。

そして本部に入って1年1カ月後に、父親が出直しました。その2か月後、私は大教会長になったわけです。

これを考えたときに、もし東京で自分の好きなことばかりやっていたらどうなっていたか。1年2年帰ってこなかったかも知れません。しかも、好きなことばかりしていたら、会長になるための、信仰者としての成人が全然間に合わなかったでしょう。

だから、親神様には一つの段取りがあって、東京へ出てどこかへ飛んでいこうとした鳥をバサッと網で捕まえるように、私の手をグッと強く握ってお道に引っ張り、引き戻してくださったのだと思うのです。

悠久の時間軸

人間の思いと神様の思いは、長さのスパンが全然違うのです。

例えば、世の中には「今日、明日のことしか考えられない」という人もいるかもしれません。1カ月後、2カ月後の先を考える人もあります。「2年後、3年後に結婚するから、そこに向かって頑張るんだ」と目標を立てる人もある。中には「将来、こういう人間になりたい」ということを若いうちから決め、そこに向かって生涯かけて進んでいこう、という気持ちの人もあるかもしれません。

しかし、大抵の人はひと月ふた月や、1年2年ぐらいしか考えられません。長くても一生です。来世のことまで考える人はいないですよね。

親神様の思いは、長い長いスパンなのです。人間をお創りくださった9億9万年前から、陽気ぐらしが実現するまでの、長い長い、いわゆる「悠久の時間軸」に親神様の思いはあるのです。

しかも、終始一貫して変わらない思いがある。それは「人間に陽気ぐらしをさせてやりたい、陽気ぐらしの世の中を実現させたい」という親心は一貫して連なっているのです。そうした親神様の親心、思いの中に、私たちは今、生きているわけです。

ですから、陽気ぐらしに向かって、楽しいことを与えてくださっている。でも、長い人生の中では、つらいことや苦しいこともある。その中を一生懸命通ったら、後々になって、「あのつらいときがあったからよかった」「あそこに親神様の親心があったんだ」と分かるときがくるのです。

コロナに込められた親心

今の新型コロナウイルス感染症の蔓延（まんえん）もそうです。

私も実はコロナにかかって、一昨日まで自宅療養をしていました。大教会の月次祭も、ご本部の月次祭も出られませんでした。予定を変えざるを得ない人もあるし、コロナで苦しんでいる人もあります。また経済が落ちてきてもいます。コロナ前のように動くこともできません。今の時点を考えれば、大変なことばかりかもしれません。

しかし、この新型コロナウイルスも、親神様が私たち人間に胸の掃除と心の入れ替えをするよう、メッセージを送ってくださっている、そういう親心なのです。

コロナはいずれ収束するでしょう。その後、振り返ったときに、「あのコロナがあったからよかった」というときが必ず来る。なぜかと言うと、陽気ぐらしへの親心の流れの中のことだからです。

神様から頂いた使命

人間を創られたときから陽気ぐらしに向かっての、悠久の親心の流れの中で、私たち一人ひとりは一つの区間、区切りを親神様から与えていただいています。それが、今なのです。

今の君たちの人生は、親神様から与えていただいている。ということは、親神様から何らかの目的、役割を頂いていると、私は思う。つまり、親神様は一人ひとりに使命を与えてくださっているのです。

例えば、生涯をかけて大勢の方に幸せを与えていく人もあると思う。周囲を笑顔にする役割、使命がある人もいるかもしれません。目の前の困っているこの人を、一生涯かけてたすけていく、これが使命である場合もある。

自分の使命は何なのか。それは、今は分からなくてもいいのです。私も後々になって分かったのです。

私は25歳で会長になりましたから、大変でした。父である前会長がいない。周囲の皆さんは、アドバイスを下さるし、支えてもくれますが、芦津大教会長を経験した人はいないわけですから、相談する人がいない。担ぐものが大きかったので、その中でいろいろな事情や問題も出てきますから、とにかくしんどかった。でも、年が若いから、経験がないから、しんどいからといって、逃げ出すわけにはいかない。とにかく、必死になってやったのです。

必死になって通って分かってきたのは、「なるほど、こうして会長にならせていただいた。これが使命なんだ」ということでした。具体的に言うと、芦津にはたくさんの教会がある。おたすけに行かせてもらおう、丹精させてもらおう、

皆を勇ませよう。そうして人を勇ませて、人をつくって、そして親神様の思召である陽気ぐらしに寄与できる教会に仕上げていくことが、自分の使命だ、ということを、後々になって気付いたのです。

自分の使命が分かると、一生懸命に通れるのです。大変なことやつらいこともたくさんありますが、「これが自分の役割だ」と、自分の進むべき方向が分かっていたら、それを乗り越えていくことができるのです。

皆さん方にも、親神様から陽気ぐらしへ向かうために、何か役割、使命を与えてくださっていると思います。今は分からなくても、今やるべきことを一生懸命やっていれば、それはいずれ分かってきます。

ですから、皆さん方一人ひとりが、親神様から大きな御心をかけていただいている、ということを心に置いてください。そして何らかの役割や使命を親神様から与えていただいているということを心に留めておいてください。「陽気ぐらしをさせてやりたい」という、親神様の大きな親心にお応えする、そんな生涯をこれから通っていただきたいと思います。

陽気ぐらしへの段取り

陽気ぐらしの世界は、一足飛びにはいきません。親神様はちゃんと段取りを踏ませてくださっています。

最初の大きな段取りは、立教です。今から185年前、親神様が教祖を月日のやしろとして、この世の表にお現れくださった。

それまでは、人間は陽気ぐらしを知らなかった。なぜ人間が生まれてきたのか、どこに向かっていくのか、何も知らなかった。それを、教祖のお口を通して、陽気ぐらしを教えてくださった。そこに向かってどのように歩んでいったらいいのか、どのように通れば御守護いただけるのかを、教祖は50年かけて教えてくださった。これが最初の段取りです。

そして50年経ったら、教祖は現身を隠され、存命の理という世界が始まった。これが次の段取りです。

それまでは、教祖は世界たすけの先頭にお立ちくださっていた。しかし、お姿を隠され、目に見えるところで先頭に立ってくださった教祖が、陰に隠れられた。そして、目に見えない理を、存命の理をもって、私たちを陽気ぐらしへと導いてくださっている。

そして、この存命の理が始まってから、陽気ぐらしへ近づいていく上で、一つ一つ段取りをつけてくださっているのが、教祖の年祭なのです。私たちは、10年ごとに教祖の年祭を一生懸命に勤めることによって、陽気ぐらしに近づいていくのです。

新時代の牽引車たれ

今、こうして世界の人々を混乱させているコロナウイルス感染症も、いずれ収束の時が来ます。コロナの後は、若い世代の人々が築いていく、お道の新しい時代が来るのです。これから3年5か月後に、教祖百四十年祭。その10年後は教祖百五十年祭です。そしてその翌年が立教二百年。

今から13年後、14年後は、天理教のターニングポイントを迎えます。いわば、陽気ぐらしに向けて大きなうねりを起こす分水嶺なのです。この時に、お道の上に大いに働き、大いに活躍をしなければならないのが、君たちです。

そのためにも、まずは目の前の百四十年祭に向かう年祭活動の三年千日、これを勇んで通り切ることです。

かつて三代真柱様は、青年会員に向け、「全教の活動の牽引車になるように」と、期待を込めたお言葉をかけてくださったことがあります。「牽引車」とは、荷物を積んだ車両を引っ張っていく機関車のことです。お道の活動をグイグイと引っ張っていく人材になることを、青年会員に期待してくださっているのです。

この秋の大祭では、百四十年祭に向けて真柱様が「諭達」をご発布くださいます。

これを受けて大教会としての方針を立てて、そして皆さん方の所属するそれぞれの教会も、この方針に沿って年祭活動を進めることになります。

大教会の年祭活動の責任者は、もちろん大教会長である私です。また、それぞれの教会も、教会長さんが責任を持つわけです。しかし、教会長を芯として進める年祭活動の動きの部分、実動の部分は、君たち青年会員が「私が教会の年祭活動の牽引車になるんだ」という心意気をもって、年祭活動に臨んでほしいと思います。

西礼拝場前で記念撮影

未来は君たちのためにある

よく「やればできる」という言葉を耳にしますが、これは「やって、できた人」が言うセリフだから、説得力を持つのです。しかし、「やってもできないこと」も実際にはあるでしょう。その一方で、「やらなければできない」ということも、また事実です。

では、何が大切なのか。社会で成功した人、またお道の中でも信仰者としてこのお道を大きく伸ばした人たちには、共通する点があります。それは何かと言えば、「その時その時にやらねばならないことをやってきた」という点です。つまり「今、やらねばならないことをやる」ということ。そして、それを積み重ねることなのです。

そして、どうせやるなら一生懸命にすることです。中途半端な考えで中途半端にやれば、中途半端なことが残るだけです。一生懸命にやることで、親神様は働いてくださいます。

今、やらねばならないことは誰にでもあると思います。それを一生懸命にやって積み重ねていっていただきたいと思います。そして全教の牽引車たる自覚と心意気で、年祭活動の三年千日を、一手一つに勇んで通り切っていただきたいと思います。

百四十年祭を勤めたその先にある、百五十年祭と立教二百年という、13年、14年後は、間違いなく君たちの時代です。

その時になって年寄りに頼っている場合ではありません。私もその頃は77歳から78歳です。十分に年寄りの仲間入りをしています。こんな者が道の先頭に立っているようでは、どうにもなりません。もちろん、歳を重ねた年配者にも役目があります。年寄りにはそれなりの知識と経験があるから、若い人たちから頼まれれば、その知恵を貸す。そして背中を押す。これが年配者の役目です。

しかし、実際にこの道を支え、陽気ぐらしへ向けて力強く歩みを進めていくのは、君たちの世代なのです。これからのお道を背負っていくのは、君たちです。そしてこれからの芦津を背負っていくのも、君たちなのです。

この先、末代続く頼もしい道を、心を合わせ、力を合わせて、明るく勇んで進んでくださることを、ここに集まった君たちに、そして芦津の若い世代の人々に心から期待をして、今日の話とさせていただきたいと思います。

これからも勇んで、この道を歩んでください。

（要旨）

《8月月次祭　神殿講話》

「元の理」を深く心に治めて広く世界へ伝えよう

役員　奥田眞治

現在、新型コロナウイルス感染症の蔓延（まんえん）とウクライナ戦争から、世界中が混乱のさなかにあります。こうした世相にあって、「世界一れつ兄弟姉妹（きょうだい）」また「互い立て合いたすけ合い」の精神をお聞かせいただくお互いは、どのように思案して通るべきでしょうか。

併せて、只今は教祖百四十年祭に向かう三年千日活動始動の日が、もう目前に迫る中、今年は「心づくり」「理づくり」の年と位置づけ、その成人に向けての道中であります。

おふでさきに、

このみちハどふゆう事にをもうかな
このよをさめるしんぢつのみち
六号　4

とお聞かせいただきます。このお道の教えはこの世治める真実の道ですから、一人ひとりが教えを実行して通ることによって、世界が治まっていくのだと聞かせていただきます。

たん〳〵となに事にてもこのよふわ
神のからだやしやんしてみよ
三号　40・135

と仰せられます。親神様の懐住まいをしている一人ひとりの人間の間違った心の遣い方が集約されて、こうした現状に現れているのだと思案をいたします。この世は神のからだであるということは、この世のすべてが親神様のものだということです。

このよふハ一れつハみな月日なり
にんけんハみな月日かしもの
六号　120

せかいぢうこのしんぢつをしりたなら
ごふきごふよくだすものわない
六号　121

かしもの・かりものの理をしっかりと心に治めることによって、私たちは傲気や強欲も出さなくなると教えていただきます。

山名大教会初代会長・諸井國三郎先生によりますと、

「教祖、御在世中の御話と云へば、大抵この泥海中のお話が多かつたが、これをお聞かせになる前には、『今、世界の人間が、元をしらんから、互に他人と云つてねたみ合ひ、うらみ合ひ、我さへよくばで、皆、勝手〳〵の心つかひ、甚だしきものは、敵同士になつて嫉み合つてゐるのも、元を聞かしたことがないから、仕方がない。なれど、この儘にゐては、親が子を殺し、子が親を殺し、いぢらしくて見てゐられぬ。それで、どうしても元をきかせなければならん』

と、云ふことをお話しになり、それから、泥海中のお話をお説きになり、しまひに、

『かういふ訳故、どんな者でも、仲善くせんければならんで』

と云つてお聞かせになつた。」

（『山名大教会改訂初代会長夫妻自伝』69頁）そうであります。

せかいぢういちれつわみなきよたいや
たにんとゆうわさらにないぞや
十三号　43

このもとをしりたるものハないのでな
それが月日のざねんばかりや
十三号　44

親神様の思召を広く世界へ伝えるためには、元の理の教えをしっかり心に治めさせていただくことが肝要であると思います。

元の理の話でたすける

元の理のお話が公然と本部より打ち出されたのは、今からちょうど百年前、教祖四十年祭活動の指針として開催された、「教会長講習会」での、『ぢばの真義』という講演（山澤為造本部員）が最初でした。

また当時は、スペイン風邪が世界中で大流行し、日本でも40万人以上の方が亡くなったと言われています。そして、スペイン風邪の

流行が収まった後に、教祖四十年祭活動「教勢倍加」という画期的な布教活動が展開されました。現在は、新型コロナウイルスによる感染症、大流行の真っ只中ですから、ちょうど100年前の状況と酷似しているように思われます。

おふでさきに、

このよふのもとはじまりのねをほらそ
ちからあるならほりきりてみよ
五号　85

このねへをほりきりさいかしたるなら
どのようなものもかなうものなし
五号　86

にほんにもこふきをたしかこしらへて

それひろめたらからハまゝなり
十号　88

この根本の理を悟ったなら、どんな者でもこれに適うものはなく、「から」に「こふき」を弘めると仰せられています。

100年前の教会長や布教師たちは、懐に元の理の教義書を忍ばせ、布教に専念していた姿が目に浮かぶような気がいたします。

元の理のお話は、天地創造の話ではなく、人間世界初まり出しの話であり、その成長を中心に説かれています。それはこの世における陽気ぐらしを中心に説かれていて、この元初まり出しのお話によって、皆たすけると仰せられ、たすけの理話であることを心得なければならないと思います。

そこで、「こふき話」16年本を参照にくもよみのみこと様の説き分けを見ますと、

くもよみのみこと（道具神）

天にては、朝の明星なり。

女神にして御姿はうなぎなり。うなぎというものは、つるつくもので、頭の方へも尾の方へも出入りするもの故、人間の飲み食い出入の道具に使い給い、この理をもつて、鰻にくもよみのみことと神名を授け給う。

人間身の内にては、飲み食い出入は、この神様の借物。世界では水気上げ下げは、この神の世話取りなり。

仏法にては、文殊菩薩、竜王、神農、薬師如来、又、水神はこの神の理なり。（深谷忠政著『元の理』より）

「仏法にては、文殊菩薩」とありますが、文殊菩薩は知恵や学問を司り、物事の正しいあり方を見極める力と判断力に優れ、その智恵で人々を悟りへ導くのだと伝えられています。

また「天にては、朝の明星」とは日の出前に東の空で輝く金星のことで、相当朝早く起きなければ拝むことができません。このことから、「朝起き」をして、働き、御礼を申し上げるような御恩報じをさせてもらうことが理に適っているように思います。

私事になりますが、天理教校附属高校の3年間はマーチングバンド部に所属しておりました。2年生の時に愛町バンドと合同で「名古屋フェスティバル」に出演したことがあります。その時の愛町分教会神殿でのお話ですが、「近頃は日曜日になると子供たちが朝勤めに参拝に来るようになって、神殿の周りの廊下を拭くひのきしんをする子供が多くなってきたのです。その理由は、廊下を拭いていたある子供の頭を、愛町の会長様が『ご苦労さんやな』と言って撫でられたら、その子供の成績がグングンと良くなったそうなのです。その話を聞きつけて、未信者の子供たちも、日曜参拝にくるようになったのです」と聞かせていただきました。今になって思うと、成る程と合点がいくのです。

朝起き・正直・働き

教祖は、「朝起き・正直・働き」の教えを、直接飯降伊蔵先生にお説きになっておられます。『稿本天理教教祖伝逸話篇』の「二九　三つの宝」の中に、

……教祖は、籾を三粒持って、「これは朝起き、これは正直、これは働きやで。」と、仰せられて、一粒ずつ、伊蔵の掌の上にお載せ下されて、「この三つを、しっかり握って、失わんようにせにゃいかんで。」と、仰せられた。

飯降伊蔵先生と言えば「千軒切っての正直者」と言われた方です。私たちが信者さんを丹精する場合、真っ正直な人に対し「正直」という教えをわざわざ説くでしょうか。おそらく説かないと思います。けれども、教祖はお説きになった。ということは、この「朝起き・正直・働き」は三つセットであると考えると納得がいくのです。

ここで一つ注目したい点が「朝起き・正直・働き」の中身についてです。ただ文字通りに考えるならば、朝起きること、正直であること、働くことと理解できますが、この言葉の意味の手がかりは『稿本天理教教祖伝逸話篇』「一一一　朝、起こされるのと」というご逸話にみることができます。

朝起きについては**「朝、起こされるのと、人を起こすのとでは、大きく徳、不徳に分かれるで。」**と仰せられ、正直とは**「蔭でよく働き、人を褒めるは正直。聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。」**続いて、働きとは**「もう少し、もう少しと、働いた上に働くのは、欲ではなく、真実の働きやで。」**と仰せられました。

この中で特に「正直」についてですが、広辞苑では、「うそやいつわりのないこと。素直で正しいこと。本当のところ。」という意味がありますが、教祖は「蔭でよく働き、人を褒めるは正直」とお教えくださいました。さらに「聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。」つまり、せっかく神様のお話を聞かせていただいても聞き流して、実行しないというような点を注意してくださっているように思います。

また「陰」については、「伊蔵はん、この道はなあ、陰徳を積みなされや。人の見ている目先でどんなに働いても、陰で手を抜いたり、人の悪口を言うていては、神様のお受け取りはありませんで。なんでも人様に礼を受けるようでは、それでその徳が勘定ずみになるのやで」（『天の定規』21頁）と仰せになります。

教祖は人の見ていない「陰」を大事にするようにお教えくださいました。誰かの見ていないところで真実を尽くす。もちろん人が見ていても真実を尽くすのですが、人の良いところを見つけては褒める。これが正直という言葉の意味するところであります。

この「朝起き・正直・働き」の教えを実行することは、誠真実と言えるのであります。現実に飯降伊蔵先生は生涯守ってお通りになり、そして「本席」というお立場を頂かれたのです。

心と口と行いの一致

さて、私たちは普段から信仰の本質と申しますか、日々に何を目標にして通らせていただいているのでしょうか。それは、誠真実を積み重ねて、親神様・教祖にお受取りいただけるように務めることであると思います。これが「理づくり」であります。

宮森与三郎先生のお話に、「誠といふものは心と口と行と三つそろはにや誠や御座いません、誠の話をするくらひの人は世界を探してごらん、竹杷（さらい）でかき集めるほどある、いくら誠なことを云ふても、それを実行せねば誠やございません、それは口だけの誠や、教祖様はこの三つがちやんと揃てあらせられたのや、それで今日の道になつて来たのや」（『みちのとも』大正6年7月号）とあります。人間は心と口と行いを合わせて生きていくことが大切であり、この三つが揃ってこそ誠であり、これを成程の人と申すのだと聞かせていただきます。私たちが目指すところは「成程の人」への成人です。

「元の理」の理解をしっかりと深めていくことで、年祭活動の御守護に繋がることを信じ、成人への歩みを進めさせていただきたいと存じます。

（要約）

立教百八十五年　八月月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長に代わり井筒敏成、慎んで申し上げます。

親神様には一れつ子供可愛い一筋の親心から、十全の御守護に満ち満ちた体をお貸し与え下され、山より高く海より深き親心を以て、陽気ぐらしへとお導き下さいます御厚恩の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。私共は、尽きせぬ御守護に日々御礼申し上げて、御恩報じの道に勤しみ励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おぢばより理のお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、座りづとめ、陽気てをどりを心を揃え勇んで勤めて、八月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、残暑厳しき中をも今日を大切な日と思い念じて参らせて頂きました芦津の道の子達が、たすけ心を尽くして共につとめの理に沿い切る状を嬉しく御覧下さいまして、親神様にもお勇み下され、いまだ人々を苦しめ続けるコロナ感染症の終息とウクライナ戦争の終結は元より、世界の人々のたすかりと世の治まりを御守護賜りますよう御願い申し上げます。

私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようぼくは、親神様から代々と賜る御恩と日々頂戴する御守護を努忘れることなく、報恩感謝の心でこの道を歩ませて頂き、教祖がお付け下されたたすけ一条の道に誠真実を尽くして、果てしなき御恩にお応えさせて頂く所存でございます。

何卒銘々のこの心根と尽くす真実をお受け取り下さいまして、願い出ます身上たすけ、事情治めの上には不思議自由の御守護を賜り、陽気ぐらし世界への歩みを心勇んで進ませて頂けますようお導きの程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

八月月次祭　祭典役割

祭主	井筒敏成	扉者	竹内義忠	扉者	岩切正義			
指図方	奥田正徳	賛者	樋川泰士	賛者	今川聖一			
献饌長	井筒文夫	伝供	在籍者一同					

	てをどり	地方	笛（ちゃんぽん）	拍子木	太鼓（すりがね）	小鼓	琴	三味線	胡弓
座りづとめ	井筒敏成 今川政治 守田清一 井筒ちぐさ 奥田富美子 榎理恵子	湯川正圀 川畑澄博 加世田洋	岩切正教 岡島秀男 井筒文夫 竹内義忠 瀧本庄司 山本義範	瀧本基志枝 岡島きよの 今川和子					
前半	瀧本眞二郎 岩切正義 河端芳雄 望月恵美 松森明美 岩切孝子	山田道弘 浜田宣郎 梶川芳男	吉田裕和 石川健郎 葭内浩 樋川泰士 中村俊和 西本義之	川畑祝子 河合遊喜恵 宗我邦代					
後半	今川聖一 村田光伸 榎康紀 山田秀子 浜田千代実 瀧本美奈	岡本久昭 河合善洋 新居里実	奥田正儀 望月慶太 瀧本一太郎 西本興正 湯川正信 川畑正博	加世田陽子 石川石美 竹内淳子					

芦津分会
おぢばがえりを開催

8月28日、青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は「芦津分会おぢばがえり」を開催、青年会員約100名を含む、約200名がおぢばに参集した（1頁に関連記事掲載）。

この日は、青年会長・中山大亮様をお迎えして大教会でご臨席総会を開催する予定だったが、直前になって大教会内で新型コロナウイルス感染症が発生したため、やむなく総会を中止。その振り替えとして、急遽（きゅうきょ）おぢばがえりと詰所での記念行事を企画した。

午前10時、西礼拝場で井筒委員長を芯におつとめ。礼拝場前で記念写真を撮影した後、詰所へ移動し、記念行事を開催。密を避けるために青年会員は大広間、それ以外の方は食堂に集まった。

最初に大教会長が挨拶。青年会員に期待を込めて「教祖百五十年祭、立教二百年は、君たちの時代。心と力を合わせて、明るく勇んで進んでほしい」と激励された（2頁より要旨掲載）。

続いて壇上に立った井筒委員長は、新委員会発足に伴い、常任委員を一人ずつ紹介した後、「何をするにも楽しんで活動できるよう、ワクワクが止まらない魅力的な芦津分会を目指そう」と会員に呼びかけた。

壇上で挨拶する井筒委員長

ここで中山大亮様、矢追雄蔵・青年会本部委員長、安井昌角・青年会本部委員が会場にご到着。大亮様よりご挨拶を頂戴した後、会員同士の交流会を行った。会員は7つの班に分かれて、自己紹介やこれからの目標などについてグループワーク。大亮様も各グループの輪に入り、会員一人ひとりと熱心に会話を交わされた。

最後に福引大会を実施。直会はなく、参加者に弁当を配布して解散した。

７つの班に分かれて、会員同士が交流

会員からは「大亮様と初めて直接お話ができた。あんなに長くお話しできると思わなかったので、嬉しかった。これから勇んで自分のできることを頑張りたい」との感想が聞かれた。

この日、任命された新常任委員は次の通り。

委員長　井筒敏成
副委員長　望月慶太　松森誠太
　　宗我道明
常任委員　久米義彦　松本　優
　　瀧本一太郎　奥野善龍
　　加藤　仁　吉田充人
　　北村真彦　山田元喜
　　大西直喜　鍋野　孝
　　洪　善明　岩切大成
　　井筒春来　岡　勇人
　　島田善人　竹内一天
　　浜田慶郎　濱本大徳
　　山下親助

（立教185年８月28日付）

学生生徒修養会・高校の部

学生生徒修養会・高校の部が、8月8日から12日にかけて、4泊5日の日程で親里で開催された。

3年ぶりの開催となった今回は「感謝から始まる陽気ぐらし」のテーマのもと、全国から約600名の学生がおぢばに帰り集った。内容は、グループワークや講義、おつとめ勉強などで基本教理を学ぶとともに、「わくわくラリー」など仲間と協力する行事を通して友情を育んだ。

芦津からは13名が受講。「最初は不安だったけど、すぐに打ち解けられて楽しかった」「たくさんの仲間ができて嬉しい。来年もぜひ参加したい」などの感想が聞かれた。受講者は次の通り。

宮田明徳（大関門）、八木理栄子、毛利祐太、井上陽（東大屋）、宮脇里奈（津阪）、中野愛斗（丸芳）、山下朝陽（芦山都）、棚原夢愛（沖縄）、岩切直大、白谷龍真、田中穂羽、伯方希帆、白谷莉瑚（四ツ山）。

お供演奏、オンパレードに出演

8月14日、芦津鼓笛バンドは、少年会本部開催の「立教185年特別企画　鼓笛お供演奏、鼓笛オンパレード」に、少年会員15名と育成会員合わせて30名が出演した。

午前9時30分、南礼拝場前で12隊合同でのお供演奏。そして10時12分、緊張した表情のままスタート位置に整列、1月から練習に取り組んできた「サンダーバード」を力強く演奏した。一手一つのパレードを披露し、37年連続金賞を受賞した。

南門跡から神殿前までをパレード

夏休みあしつ親子参拝　育成部

8月23日、育成部（山田道弘部長）は「夏休みあしつ親子参拝」を実施した。

育成部では「家族が揃って教会に参拝することは、縦の伝道において大切な角目」として、「教会長子弟育成プロジェクト」の一環として、5年前からこの親子参拝を実施している。この日、大教会近隣の教会長、ようぼくの子弟たちが、親子揃って大教会の8月月次祭に参拝した。

新型コロナウイルス感染症の影響のため、直会やお楽しみ行事などは実施できなかったが、子供たちに祭典のお下がりを配布し、昼食時にはかき氷を振る舞った。

祭典のお下がりを子供たちに配布

新委員会発足

少年会・学生担当委員会

青年会新委員会発足に伴い、少年会、学生担当委員会も新委員会が発足した。

少年会

団　長　加世田　洋
副団長　花岡　忠和
　　湯川　正信
　　梶川　和人
委　員　今川　聖一
　　吉田　裕樹
　　川畑　正博
　　榎　康紀
　　梶川　芳征
　　松本　優
　　宗我　道明
　　吉田　充人
　　瀧本一太郎
　　松林　英也
　　高馬　丈典
　　松井　修
　　山田　秀子
　　岩切　治代
　　浜田千代実
　　花岡由紀子
　　瀧本はるえ

学生担当委員会

委員長　木村　真次
副委員長　奥田　正儀
委　員　山下　吉生
　　日樫　勝郎
　　松森　誠太
　　武藤　哲想
　　岡島　藤也
　　西本美智恵
　　奥田　千晶
　　石川　石美
　　吉田　圭子
　　松森　瞳

（立教185年8月28日付）

事情はこび

立教185年8月25日お許し
吉野川分教会
任命

七代会長
宗我道明（そがみちあき）　34歳

平成19年おさづけの理拝戴。天理大学卒業。その後、大教会、詰所会長宅で青年勤め。平成30年布教の家大阪寮入寮。現在、青年会芦津分会副委員長、少年会委員、徳島教区災救隊総務、教区育成部員などを務める。
就任奉告祭　10月30日

上郡分教会
任命

四代会長
大西直喜（おおにしなおき）　34歳

平成20年おさづけの理拝戴。高知大学理学部中退。平成22年修養科第834期修了。岡山で飲食店に約7年勤務し、その後、教人資格講習会、教会長資格検定講習会へ。現在、青年会芦津分会常任委員を務める。
就任奉告祭　11月13日

会長室報

女子青年勤務辞退
【詰所会長宅】
加世田もとよ（大　島）
立教185年8月26日

教務部報

修養科教養掛（7～8月）
教養掛主任
井筒　文夫
教養掛
石川　健郎・吉田　裕樹
葭内　浩・西本　興正
岡島きよの・松森　明美

おさづけの理拝戴《7月》
小村　真未（吉野川）
〈拝戴日順　1名〉

修養科第972期修了
八木はるか（東大屋）
立教185年8月27日

初席《7月》
〈1名〉山城谷・鎮名
〈順序運びより　2名〉

秋季大祭のおぢば帰りについて

立教185年10月26日（水）は、立教の元一日を祈念して勤められる秋季大祭の日であり、教祖百四十年祭へ向けての年祭活動の指針となる「諭達第四号」をご発布くださる大切な日です。
教会長並びに主立つ方々は、おぢばに帰らせていただき、揃って「諭達」を受けさせていただきましょう。

※一堂に会しての参拝や会合などは予定しておりませんが、体調管理や感染症対策は万全にしてお帰りください。

月例統計（自令和4年1月1日～至令和4年7月31日）

項目 / 名称（）内教会数	初席	おさづけの理拝戴	修養科修了	教人
大教会（1）	9	10		
靱（13）		1		
東津（23）	1	2	1	
吉野川（29）	2	2	1	1
島原（16）	6	1		
日方（15）	3			1
稗島（7）	2	1		2
本津（2）				1
日高（2）				
姶良（5）				
津和（12）		1		
門司（6）	1	1		
當別（6）	1			
大島（26）		1	2	
沖縄（3）		1	3	
尼崎（2）	1			
四ツ山（5）		1		
大冠（2）				
島下（1）				
天保山（3）		1	1	
青木（1）				
芦浪（1）		1		
甲邊（1）	1			
芦華（1）				
天津（1）				
入江（1）				
豊野（1）	1			
紀周（3）	1	3	1	
勝明（1）				
神の島（1）				
兵庫眞洲（1）		2		
芦ノ郷（2）				
本明勇（2）				
明道（1）				
芦東（1）				
和鎮（3）	2			
神滝本（1）				
芦明徳（1）	1			
真明彰化（2）				
本氣（2）				
芦明照（1）				
真伯（1）				
合計（209）	32	29	9	5